世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『デュファルジュ先生の帰国』

第 27 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第二十七話「デュファルジュ先生の帰国」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード
モリー

ジェームス

（ピーター）

デュファルジュ先生

古本屋の主人

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メルの一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・三階への階段（夜）

踊り場で――屋根裏に戻るセーラを取囲んでいる寝間着姿のラビニア、ジェシー、ガートルード。

ラビニア「ね、セーラ……あなたに頼むことがあるのよ」

セーラ「どうしたの、こんな時間に……」

ラビニア「シィッ！」

セーラを制すると、紙片を出し、突き出す――

ラビニア「この手紙、明日の朝までに、フランス語に直しといてくれない？」

セーラ「ええッ……」

ジェシー「私のも……」

一方で、驚いて見守っているベッキー。

セーラ「で、でも……これ、デュファルジュ先生のフランス語の宿題じゃなくて？」

ラビニア「だったら、どうだって云うのよ！」
セーラ「宿題は、自分でやらなくてはいけないわ」
ラビニア「フン、うるさいわね……あなた、ロッティやアーメンガードたちにフランス語教える代用教師でしょ……私たちにだって、少し位教えたっていい筈よ」
セーラ「そ、そんな……」
ラビニア「じゃ、頼んだわよ！」
三人、紙片を押しつけると、ラビニアは三階へ、ジェシー、ガートルードは二階へ、ぱっと駆け去って行く。
茫然と立尽すセーラ——紙片を見る。
ベッキー「お、お嬢様……」
駆け寄る心配そうなベッキー——

2　同・屋根の上（朝）

同・屋根の上朝日が差し、雀たちが舞い降りる。

3 同・屋根裏部屋（朝）

同・屋根裏部屋雀たちの啼き声。
メル一家が壁穴から顔を出し、心配気に見上げる――
粗末なテーブルに、突っ伏して眠っているセーラ――
その手から握られた羽ペンがポロリと落ちる。
テーブルには、書きかけの紙片やインク壷――
メルたちの声に、はっと眼をさますセーラ――
セーラ「あ、いけない……私、昨夜、書きかけのまま……」
その時、ノックの音――
セーラ「は、はい……」
ベッキーの声「お早うございます、お嬢様！」
セーラ、急いでドアへ行き開ける。

セーラ「あ、ベッキー、お早う……」
ベッキー「あの、もう、下へ行かなきゃならないお時間で……」
セーラ「え、もう……有難う、ベッキー……」

4

同・台所

スープの大鍋がモウモウと湯気をあげる中で——忙しく働くジェームス、モリー、セーラ、ベッキーたち。

ジェームス「さあ、運んだ運んだ運んだ！」
セーラ「はい、ジェームスさん……」

5

同・地下の食堂（朝）

大鍋のスープを運んで来るセーラ。パンの篭を抱えて来るベッキー。それぞれ、テーブルに並んだ皿に盛り分け

る。

　聞こえている振鈴の音――

　やがて、どっと女生徒たちが入って来る。

アーメンガード「お早う、セーラ！」

ロッティ「お早う、セーラ・ママ」

セーラ「お早う、アーメンガード、ロッティ」

　続いて入って来るラビニア、ガートルード、ジェシーたち――一瞬、セーラを見て顔を見合せたが、ラビニアを先頭に、つかつかとセーラの傍に来る。

ラビニア「頂戴！　昨夜頼んだの」

セーラ「あの、それが、まだ終りまで出来てなくて……」

ラビニア「なんですって？」

セーラ「昨夜、私、疲れていて、いつの間にか眠ってしまって」

ラビニア「呆れた！　どうする気よ」

セーラ「ごめんなさい……もう少しだから、授業が始まる迄には出来

ると思うわ」
ラビニア「確かでしょうね」
セーラ「え、ええ……」
ジュシー「よかった……！」
その時、入口にミンチンとアメリアが入って来るのが見える――
ラビニア「シッ……じゃ、あとで必ずよ！」
ラビニアたち、ぱっと自席へ駆け戻る。
ラビニア「お早うございます、院長先生！」
女生徒たち、一斉に唱和する。
女生徒たち「お早うございます、院長先生……」
ミンチン「お早う……皆さん、席につきましたね」
立尽すセーラに気づき、叱りつける。
ミンチン「セーラ……なにをしてるんです……早く、食事の用意をなさい！」

セーラ「は、はい、院長先生……」

セーラ、スープをつけはじめる―― 心配顔でパンを配るベッキー。

ニヤリと顔を見合せるラビニアたち――

6 同・地下の洗い場

空になったスープの大鍋を下げて来るセーラ、遅れて、空のパン篭を手に入って来るベッキー。

ベッキー「お嬢様……ここは、私が致しますから、どうか、フランス語のお手紙とかの方を……」

セーラ「え……?」

ベッキー、微笑で肩をすくめてみせる。

ベッキー「ウフッ、きっと、あの方たち、これでもうお嬢様に威張れなくなりますわ……」

セーラ「（微笑）まあ、ベッキーったら」
ベッキー「さ、どうぞ、あちらで……」
セーラ「有難う、ベッキー……」

7 同・地下の作業場

入って来るセーラ、棚から羽ペン、インク壷、紙片をとると、アイロン台に向って、続きを書きはじめる。

8 同・表玄関

本を小脇に抱え、ゆっくりと来るデュファルジュ――
振鈴の音が鳴りはじめる――

9 同・地下の作業場

同・地下の作業場その振鈴の音が聞えている。
アイロン台で、紙片に向って羽ペンを走らせているセーラ、書き終る――

セーラ「さ、やっと終ったわ……急がなくては……」

10 同・廊下

紙片を手に、教室へ急ぐセーラ――

× × ×

ふと、応接室のドアが開き、本を抱えて出て来るデュファルジュ、怪訝にセーラのあとを見送る――

11 同・教室

紙片を手に、入って来るセーラ。

ラビニアたちが、一斉に見る。

ラビニア「遅いじゃないの！」

セーラ、その席に行く。

セーラ「ごめんなさい、やっと今終って……はい……」

紙片をそれぞれに渡す——

ジェシー「わあ、さすがお母さんがフランス人だっただけあるわね」

ラビニア「フン……ま、勘弁してあげるわ」

ガートルード「先生には内緒よ！」

その時、一方にデュファルジュの咳払い。

ラビニアたち、はっと振返る——

ドアの入口に立っているデュファルジュ。

デュファルジュ「ボン・ジュール……マドモワゼル……」

ラビニアたち、一斉に挨拶する——

女生徒たち「ボン・ジュール……ムシュウ、デュファルジュ……」

デュファルジュ、教室を出損ったセーラに、微笑を向け

る――

デュファルジュ「どうしたね、セーラ君……君が教える教室は、お隣りの筈じゃが……」

セーラ「は、はい……」

ラビニアが小声でせき立てる。

ラビニア「早く行きなさいってば！」

セーラ「失礼しました……」

セーラ、デュファルジュに一礼すると、出て行く――

肩をすくめて見送るデュファルジュ――

12	同・廊下

出て来たセーラ、ほっと息をつく。待っていたシーザーが、ニャオン……とすり寄る。

セーラ「シィィッ……」

隣りの遊戯室のドアへ行く――続くシーザー。

13 同・遊戯室

入って来るセーラ―― とシーザー。

待っていたロッティ、ジェイン、ペネラピ、スーザンと、

アーメンガードが迎える――

ロッティ「あ、セーラ・ママ先生！」

セーラ「ごめんなさい、遅くなって……」

アーメンガード「セーラ……ラビニアたちの宿題……」

セーラ「もういいのよ……さ、今日は絵本で勉強しましょうね」

ロッティ「わあい……！」

14 同・教室

教卓で、生徒たちを見渡すデュファルジュ——
デュファルジュ「さてと……先週出しておいた宿題じゃが……」
ざわめく一同——
デュファルジュ「ラビニア君とジェシー君とガートルード君には、夏休み前に、御両親にフランス語で手紙を書いてみるよう云っておいたが、うまく書けたかな」
ラビニア「ウイ、ムシュウ、デュファルジュ」
ジェシー「ウィ、ウィ」
ガートルード「ウィ」
ラビニアたち、得意気に紙片をかかげる。
デュファルジュ「ほほう……では、ジェシー君」
ジェシー「ウィ……」
紙片を渡しに出ようとする——
デュファルジュ「いや、そこでよろしい」
ジェシー「え……」

デュファルジュ「読んで頂こうかな、その手紙を」
愕然となるジェシー――
ジェシー「よ、読むって……いま、ここでですか……」
デュファルジュ「ウィウィ……いま、ここでだよ、ジェシー君」
ジェシー、どぎまぎしたが、仕方なく手にした紙片を拡げる。（Je prends la liberté de vous dire… 拝啓）
読もうとするが、忽ちつかえる――
ジェシー「ジュ……ジュ、プレ……ジュ・プレンド……（首をひねる）」
クスクス笑いはじめるダイアナたち――
デュファルジュ「どうしたんじゃね……自分で書いたフランス語が読めなくなったのかね」
どっと笑うダイアナたち――
デュファルジュ「よろしい……では、ガートルード君」
ジェシー、坐り、ガートルードが紙片を手に仕方なく立

上る。
デュファルジュ「読んでくれたまえ」
ガートルード「ジュ……ジュ、ジュ、ジュ……」
忽ちつかえ、首をひねる――
どっと笑うダイアナたち――
嘆息して両手を拡げるデュファルジュ。
デュファルジュ「では、ラビニア君……」
ラビニア、きっとデュファルジュを見返したが、突然、手にした紙片をくちゃくちゃに掌の中で丸め、顔をそむける。
デュファルジュ「ほう……読みたくないと云う訳かな？」
ジェシーが、ラビニアを真似て紙片をまるめる。ガートルードも急いで追従して紙片をまるめる――
デュファルジュ「ほほう、諸君も御同様とは奇妙じゃな……では、失敬じゃが……」

デュファルジュ、ラビニアに近づくと、掌の中からゆっくりと紙片をつまみ出し、拡げて見る――　流石に動けないラビニア。

デュファルジュ「ふうむ……」

今度は、ジェシーの手から紙片をつまみ取り、拡げて読む――　動けないジェシー。

デュファルジュ「ほほう……」

更にデュファルジュ、ガートルードの手から紙片をとり、拡げ読む――

デュファルジュ「なあるほど……」

デュファルジュ、ゆっくりと三人を見直す――

デュファルジュ「いや、三つとも、仲々立派なフランス語じゃね」

顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード――

デュファルジュ「しかし、諸君……今度、宿題をセーラ君に頼む時は、読み方も習っておくようにしたまえよ」

——どっと笑う一同。

ラビニア、ジェシー、ガートルード、真っ赤になってうつむく。

デュファルジュ「では、他の諸君の宿題を拝見しよう……ダイアナ君に、リンダ君……」

デュファルジュ、その方へ行く——

口惜し気に見送るラビニアたち——

ジェシー「(呻く) きっと、セーラが云いつけたんだわ」

ガートルード「そうよ、きっとそうよ……」

ラビニア「いいわ……この儘ではすまさないから！」

鋭くデュファルジュの方を見る——

（中　C　M）

15

同・遊戯室

ロッティ、アーメンガード、ペネラビ、ジェイン、スーザンたちに、絵本の絵を示して発音を教えているセーラ

——

セーラ「レグリーズ……（L'eglise　＝教会）」

一　同「レグリーズ……」

セーラ「そうそう……教会の事ね」

16

同・廊　下

院長室から出て来たアメリアが、振鈴を鳴らす——

17

同・遊戯室

その振鈴の音が聞える――

セーラ「さ、今日は、これでおしまいにしましょうね」

ロッティ「わあ、もっとセーラ・ママ先生に習いたいのに、つまんないあい！」

セーラ「まあ、ロッティ……」

18

同・教室

デュファルジュも授業を終える――

デュファルジュ「では、今日はここまで……オ・ルボワール、マドモワゼル……」

一同「オ・ルボワール・ムシュー・デュファルジュ……」

――無言のラビニアたち。

19

同・廊下

出て来るデュファルジュ、遊戯室の方へ足を向ける。
遊戯室のドアが開き、ロッティたちに囲まれたセーラが出て来る。
セーラ「あ、デュファルジュ先生……」
デュファルジュ「どうだね、授業の方はうまく行ってるかね」
セーラ「は、はい……」
ロッティ「私、フランス語、うまくなったもん！」
デュファルジュ「ほほう……そりゃよかった」
笑うデュファルジュと、セーラ――
セーラ「では、下の仕事がありますので」
デュファルジュ「御苦労だね……だが頑張り給えよ」
セーラ「はい、デュファルジュ先生……」
セーラ、一礼すると台所の方へ去る。
優しく見送ったデュファルジュ、ゆっくりと応接室のドアに入って行く――

×　　×　　×

離れて、そのデュファルジュを見送っているラビニア、ジェシー、ガートルード。

ジェシー「ね、ラビニア……この儘すまさないって、一体どうする気？」

ラビニア、ジロリと見返す――

ラビニア「ここで待ってるといいわ」

いきなり一方へ――

ガートルード「ラビニア……！」

×　　×　　×

20 同・院長室

院長室の前に来たラビニア、ドアをノックする――

ミンチンの声「お入り……」

入って来るラビニア――

アメリアといたミンチンが振返る――

ミンチン「おや、ラビニアさん……どうなすったんです？」

ラビニア「はい……私……セーラの事で、院長先生に、申上げたい事
があるんです」

ミンチン「なんですって？」

21

同・地下の作業場

戻って来るセーラ――

アイロン掛けをしていたベッキーが振返る――

ベッキー「あ、お帰りなさいまし、お嬢様……アイロン掛け、お嬢様
ほど上手く行きませんけど、やっときましたから」

セーラ「有難う、ベッキー」

ベッキー「なあにィ……お嬢様がフランス語お教えなさる事にくらべ

りゃ、やさしいこってすもの……」

セーラ「まあ……」

セーラ、笑って棚の前掛けをつける。

野菜篭を摑んだジェームスが入って来る

ジェームス「セーラ、もたもたしてねえで、早く買い出しに行って来るんだ」

ジェームス「ベッキー、お前はセーラの代りに表の掃除だよ！」

セーラ「は、はい、ジェームスさん」

ベッキー「はい、只今……！」

22 同・使用人階段

野菜篭を抱えたセーラと、掃除道具を抱えたベッキーが上って来る。

ベッキー「じゃ、お嬢様、お気をつけて」

セーラ「有難う、ベッキー……」
セーラ、街路へ――
見送ったベッキー、表玄関を洗いはじめる――

23 同・院長室

ミンチン「なんですって……デュファルジュ先生が、セーラをヒイキしていると……？」
ミンチンの前のラビニアが頷く――
ラビニア「本当なんです……デュファルジュ先生は、あのセーラにフランス語の本まであげて……私、みんな知ってるんです」
ミンチン「まあ、そんな事まで……」
驚くアメリア――
ラビニア「院長先生……私、この学校の生徒でもないメイドのセーラが、あんなにデュファルジュ先生に大事にされてるのが、

我慢出来ないんです……こんな事が続くのでしたら、私、
この学院をやめたいって、お母様に手紙を……」

ミンチン「お待ちなさい、ラビニアさん……」

ミンチン、腕を組み、焦々と歩き廻りはじめる——突然、立停ると、

ミンチン「アメリア……！」

アメリア「は？」

ミンチン「矢張り、デュファルジュ先生には以前から考えていた通りにして頂く必要があるようですね」

アメリア「お、お姉様……！」

ミンチン「いいえ、私からお話しましょう！」

24 同・応接室

テーブルで、自分で注いだポットの紅茶をゆっくりと愉

しんでいるデュファルジュ――
ノックの音――
デュファルジュ「はい、どうぞ……」
ドアが開き、ミンチンが入って来る。
デュファルジュ「やあ、院長先生……」
ミンチン「デュファルジュ先生……実は、一寸お話したい事がございましてね」
デュファルジュ「ほう……私に、なにか」
ミンチン「失礼……」
ミンチン、デュファルジュの前に坐る。
ミンチン「デュファルジュ先生……ご存知と思いますが、この学院にはこの学院の教育方針と申すものがございましてね」
デュファルジュ「いかにも……」
ミンチン「例えば、セーラについてです……」
デュファルジュ「ほう、セーラ君の事で？」

25

コベントガーデン市場の一角

ピーターに、野菜の篭を受けとるセーラの姿――

ミンチンの声がかぶる――

ミンチンの声「御承知の通り、あの子は、父親の不幸に逢って以来、私の特別の温情でメイド代りに置いてやっている子です……」

26

ミンチン女学院・院長室

ミンチン「そのセーラに、不必要な同情を寄せたりなされては、他の生徒の手前大変に困るのです」

デュファルジュ「しかし、ミンチン先生……」

ミンチン「いいえ、先生が、私の方針に反対なのは、存じておりますわ」

デュファルジュ、無言で見返す。

ミンチン「（微笑をつくる）私、実は、先生におすすめしたい事がございますの」

デュファルジュ「ほう……」

ミンチン「こう申しては失礼かも知れませんけど、先生もお年ですし、ここらで暫くお休み下さっては如何でしょうかしら……勿論御希望ならお国へお帰りになってもよろしい訳でございますけど」

凝然とミンチンを見るデュファルジュ。

デュファルジュ「つまり……この私に、やめろと云う御忠告のようですな」

ミンチン「（微笑）ま、そう云った声も、生徒たちの一部にございます。私も、御両親たちの手前、人気のない先生には困る訳でございましてねえ、ホホホ」

撫然と見返すデュファルジュ——

27

同・表玄関

ベッキーが掃除をしている――
ドアが開き、出て来るデュファルジュ。

ベッキー「あ、先生さま……（あわててどく）」
デュファルジュ「いや、いいんだよ……所でセーラ君は？」
ベッキー「はい、今、市場へお買物に……」
デュファルジュ「そうか……では、セーラ君に伝えておいてくれ給え
……もう、二度と逢う事もなかろうが、元気で頑張
って呉れるように、とな」
ベッキー「え？……は、はい……」
デュファルジュ、本を抱えて、ゆっくりと帰って行く――
――
茫然と見送るベッキー

28 同・廊　下

ミンチン「（叫ぶ）静かに！……静かになさい！」
　ざわめく女生徒たちが、一斉に静まる。
ミンチン「今迄、皆さんにフランス語を教えて来て下さったデュファルジュ先生は、御都合で今日限りおやめになる事になりましたが……」
　どよめく女生徒たち――
　冷笑して顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード――
　驚くアーメンガード、ロッティたち――
ミンチン「後任のフランス語の先生は、早速お呼びしてありますから、心配しないように……判りましたね、皆さん……」
　ざわめく女生徒たち――

29 同・表

愕然となるセーラ――

セーラ「なんですって……デュファルジュ先生が……」

ベッキー「はい……二度と逢えないだろうけど、頑張るようにと……」

セーラ「ベッキー、お願い！」

いきなり野菜籠を押しつけざま取って返す――

ベッキー「お、お嬢様……！」

30 街の通り

街の通り走るセーラ。

31 古本屋の表

主人が手にした本に、はたきをかけている――

探しながら来るセーラ――近寄る。

セーラ「あの、この近くにデュファルジュ先生と云う方がお住いの筈なんですが」

主　人「ああ、デュファルジュ先生なら、うちの三階に下宿してなさるよ」

セーラ「えっ……」

主　人「上り口はそこさ」

セーラ「あ、有難うございます！」

32 同・階　段

駆け上って来るセーラ、プレートを見てノックする――

ドアが開き、デュファルジュが現われる。

セーラ「デュファルジュ先生！」

云いざま胸に飛び込む――
デュファルジュ「セ、セーラ君……」

33 同・デュファルジュの部屋

本、本、本の山の中で、セーラを優しく抱くデュファルジュ――
セーラ「私、先生がお辞めになると聞いて、夢中で探して……」
デュファルジュ「有難うよ、セーラ君……」
セーラ「先生が、先生が私の事で……」
デュファルジュ「(微笑で首を振る) いや、私は、君の為に辞めた訳ではない、以前から考えておった事なんじゃよ」
セーラ「えっ……」
デュファルジュ「ロンドンも良い街じゃが、私のように年をとって来ると、冬の寒さが少々こたえるようになってな……

それで、私の生れ故郷の、温い南フランスの村へ帰りたくなって来たんじゃよ」

デュファルジュ、微笑でセーラをみつめる――

デュファルジュ「セーラ君……人生には辛い事もある……だが、希望を捨てず努力する事じゃ、神様はきっと君の助けになってくれる筈じゃよ……」

セーラ「デュファルジュ先生……」

デュファルジュ「私も来週はフランス行の船に乗っとる事じゃろう……君とはこれで最後じゃろうが、私はいつまでも君の事を忘れんつもりじゃよ」

セーラ「デュファルジュ先生……！」

セーラ、デュファルジュの胸にすがりつく――

デュファルジュ「セーラ君……」

優しく抱きとめるデュファルジュ――その眼に涙が光っている。

34

ロンドン港の波止場（別の夜）

霧の中を――「ボウッ……」と、汽笛を鳴らして出て行く汽船の船影。

セーラのN「デュファルジュ先生が、フランスへお発ちになる日……」

35

ミンチン女学院・屋根裏部屋（夜）

エミリーを抱いて、じっと汽笛の音を聞いているセーラ

――

セーラのN「見送る事も出来ない私は、辛い悲しみの中にただじっと汽笛の音を聞き続けていたのでした……」

（第二十七話　終　）